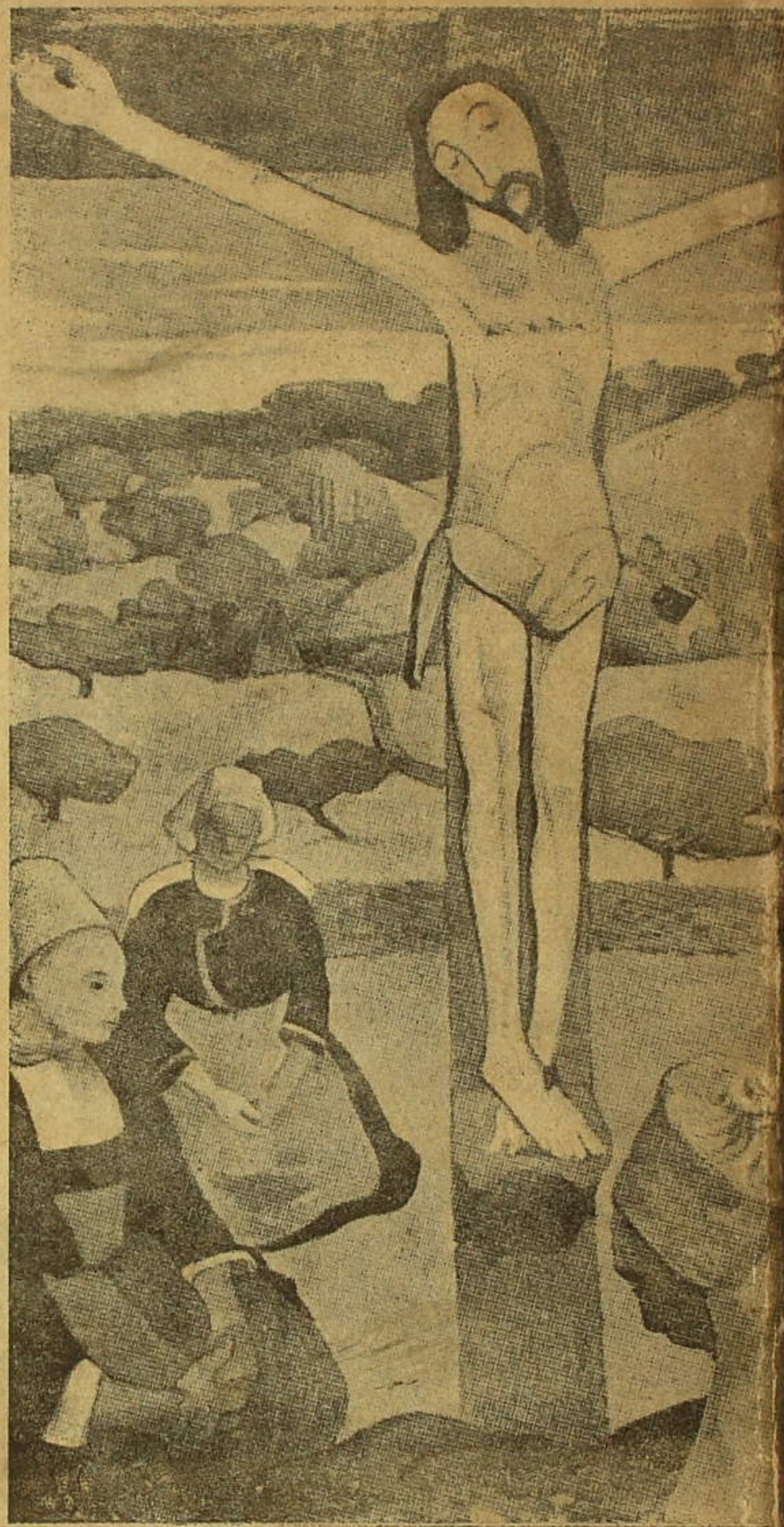
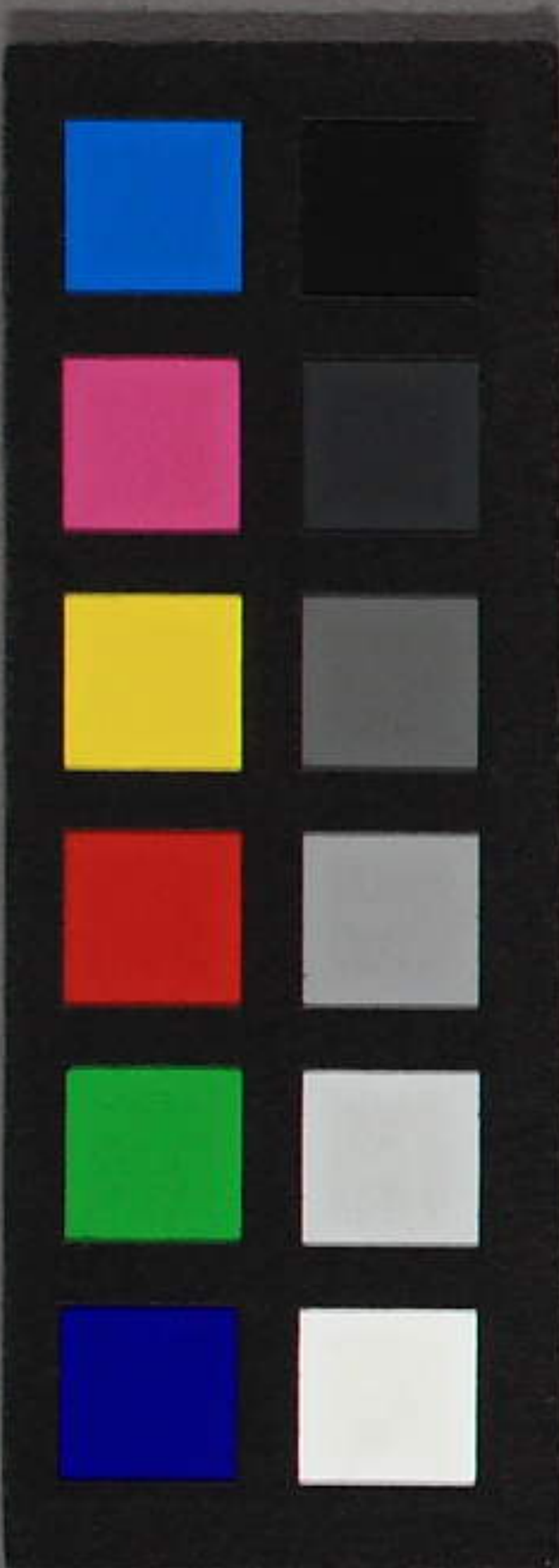


黄昏に

土岐哀果作

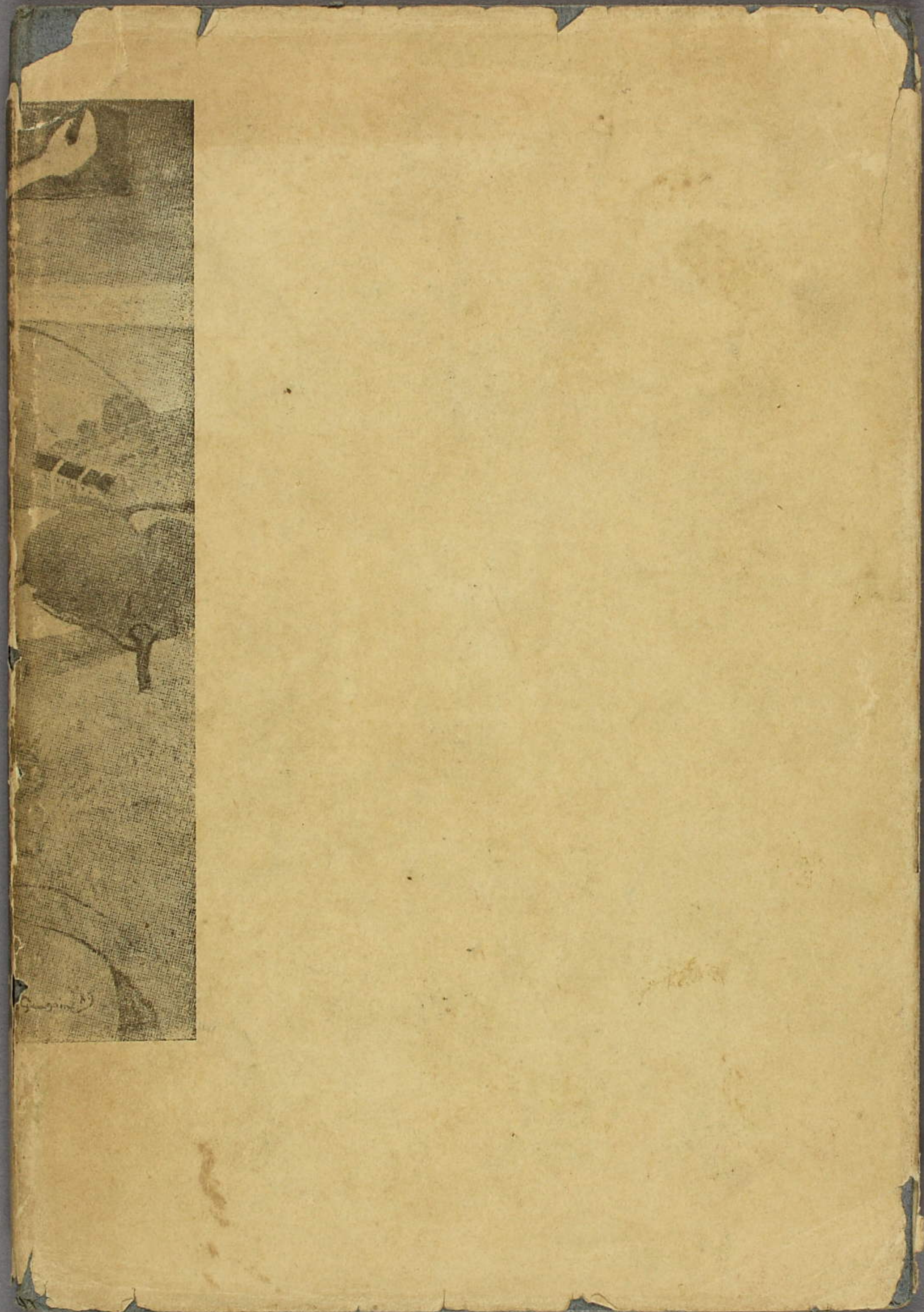


東京
東雲堂藏版
1912





東



黄昏に

土岐哀果作



東京
東雲堂藏版
1912

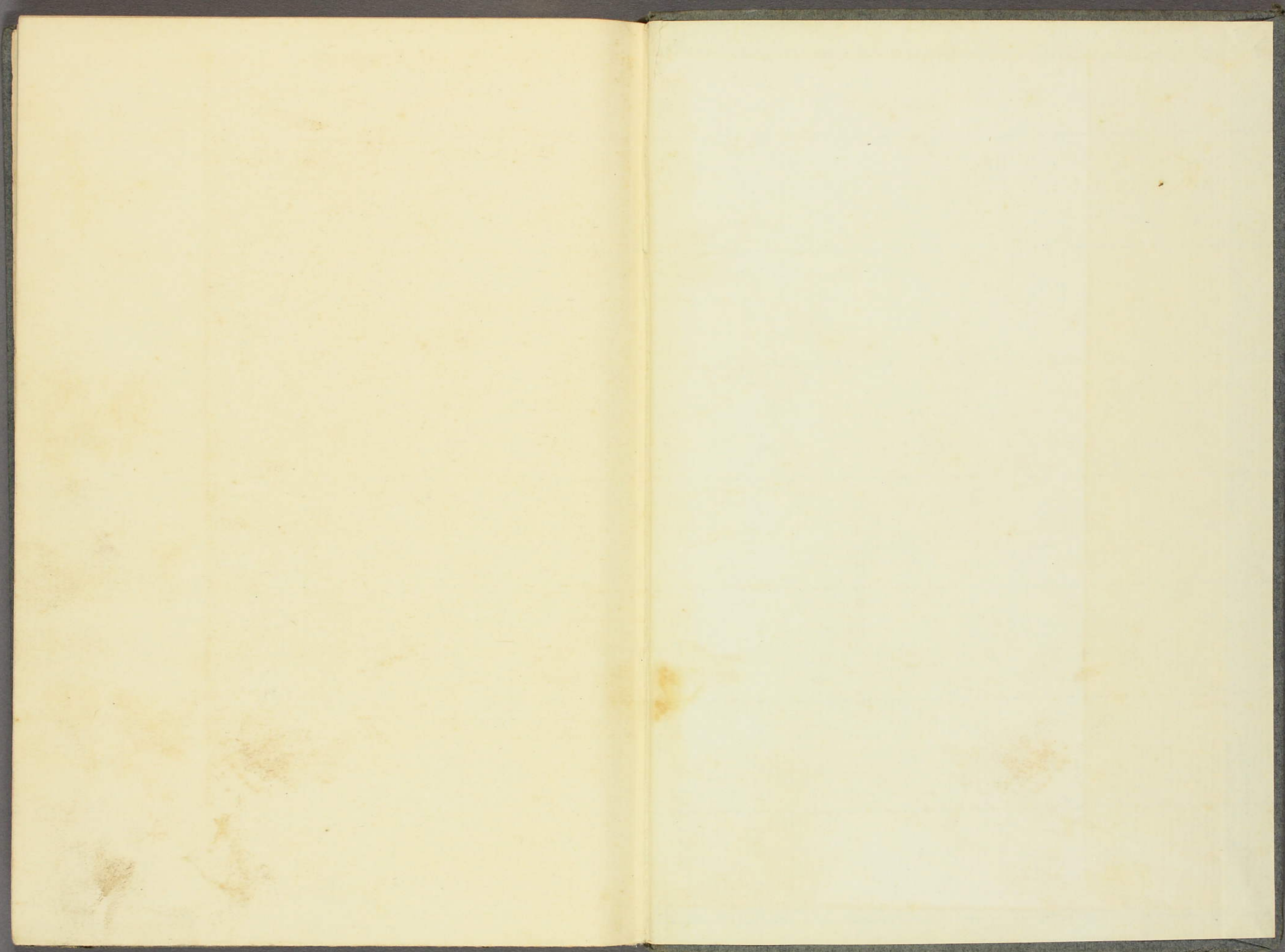


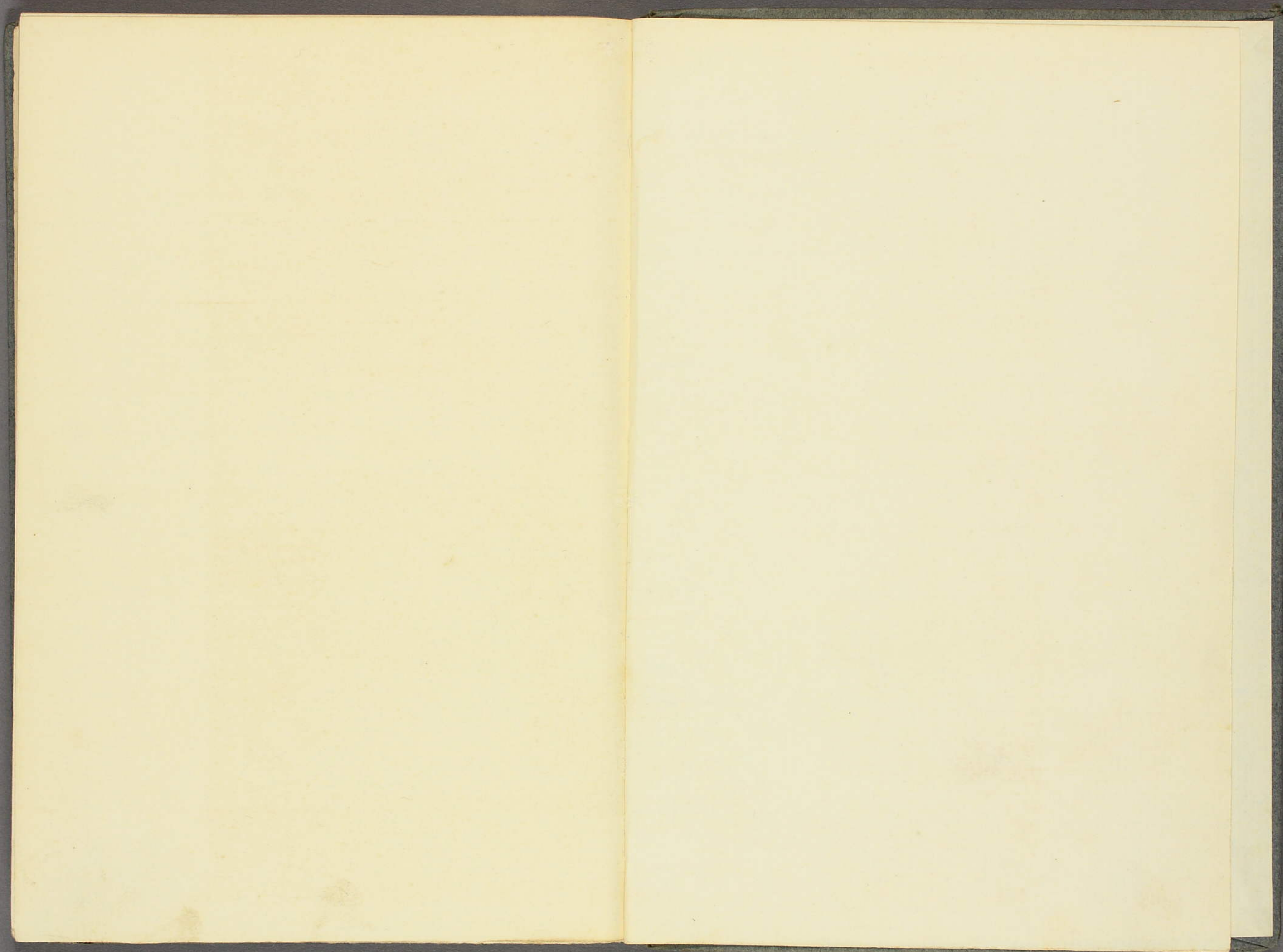
黃昏に

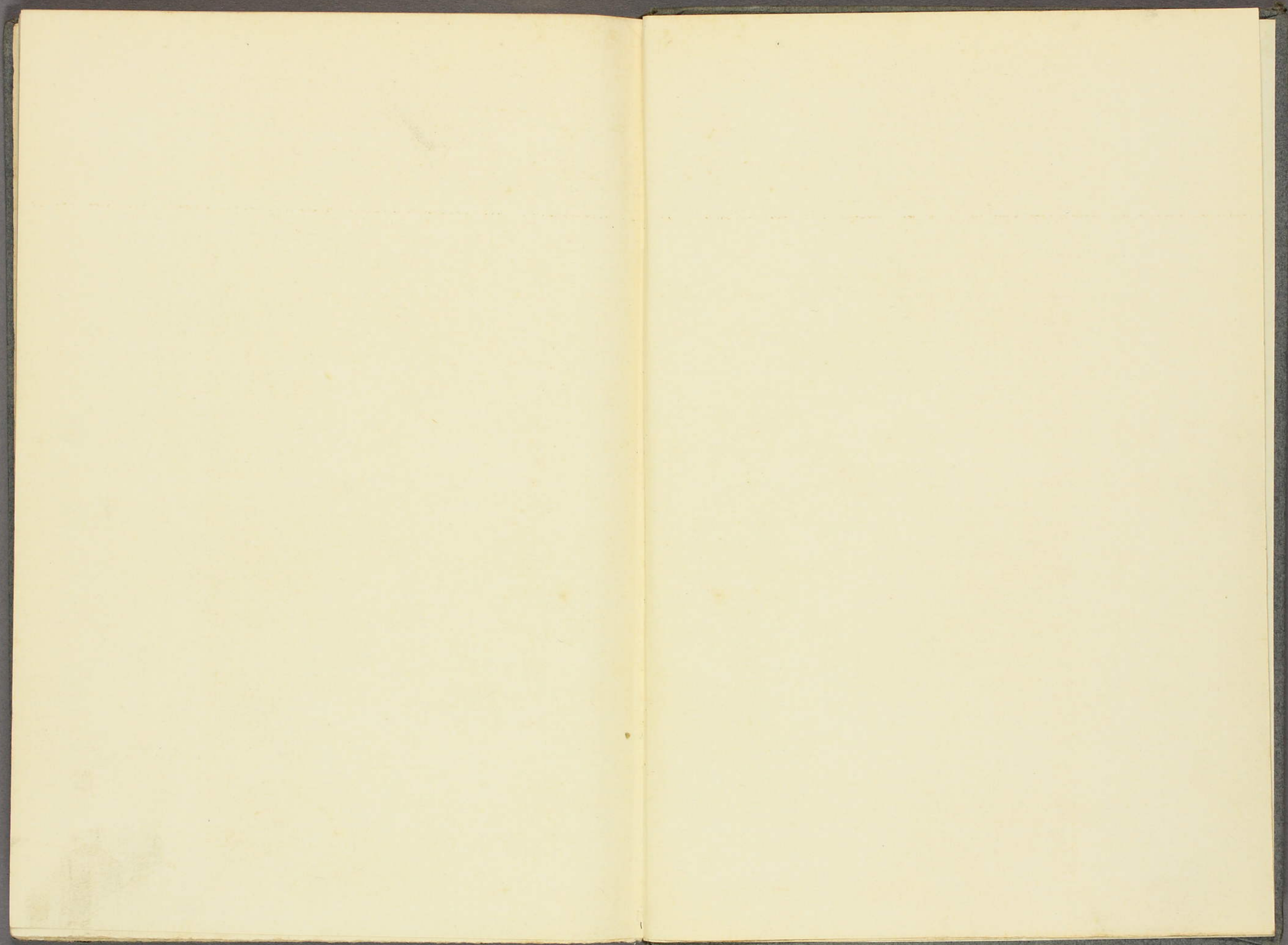
土岐哀果作

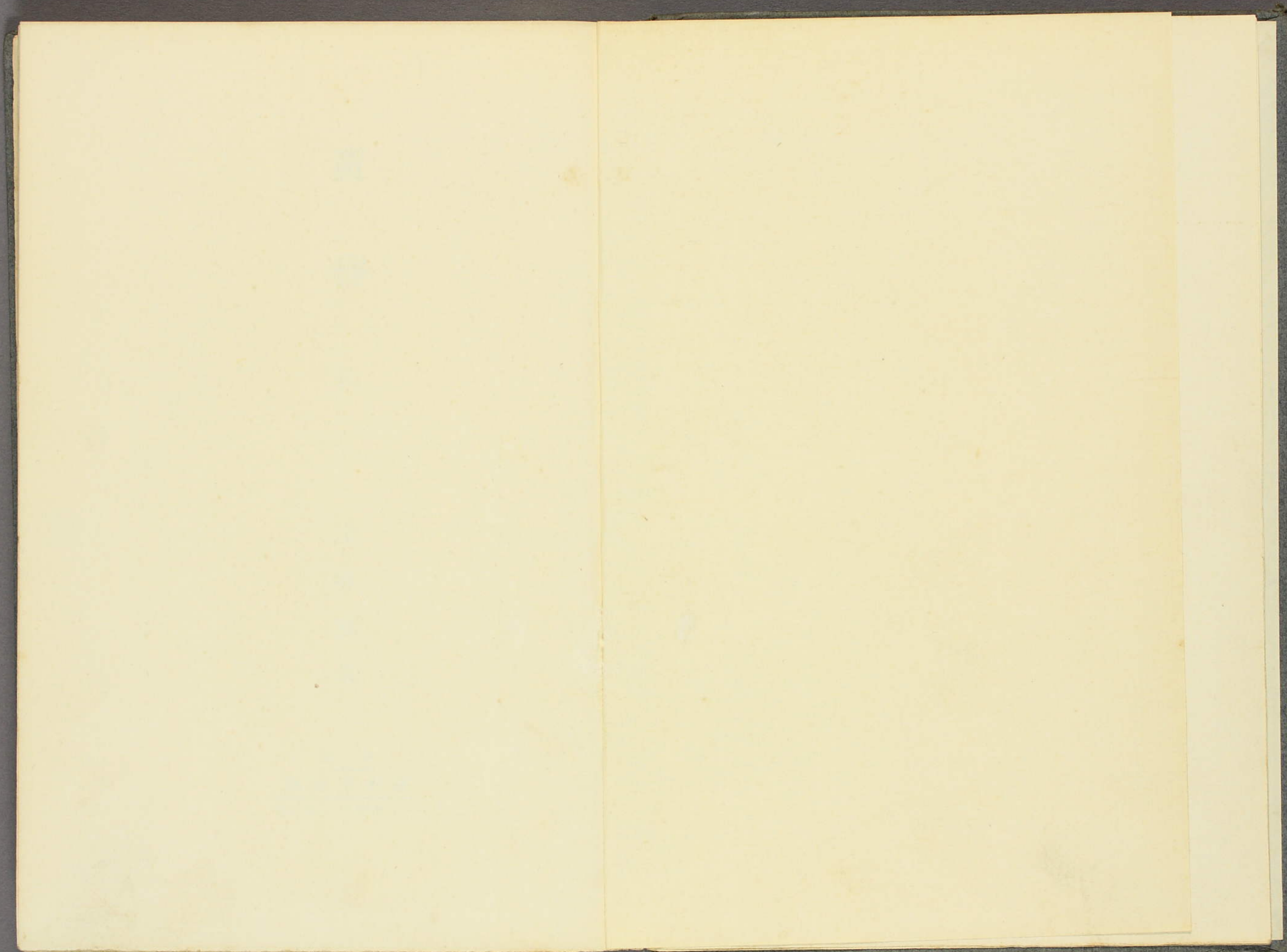
——
黃昏に
土岐哀果
——











黃昏

土岐哀果

東京
東雲堂藏版
一千九百二十年二月

この小著の一冊をとつて、
友石川啄木の卓上におく。

に 昏 黄

街 女 そ ソ
と の フ
家 前 ア
と 後 の
上



上のアソ

指をもて遠く迎れば、水いろの、
ウオルガの河の、
なつかしきかな。

*

おほきなる犬を飼はむとおもひけり
落葉の林を、
ひとり歩きつ。

ものと思ひつつ、街路を歩めば、
行人の顔の、さもしさよ。
べつと睡する。

*

働くために生けるにやあらむ、
生くるために働けるにや、
わからなくなれり。

*

寢臺よりさぐれど、朝の、
スリツバの足にかからず、
また寢てしまひぬ。

門カドの前マエの、子こどもどもの聲こゑのうるささよ。
書しよ齋さいのうちを、
ひとり歩あゆめる。

*

快こころよく、腹はらのはれるに、
坂さか路みちの、まへの車くるまを、
つと、押おしてやりぬ。

*

髪かみを長ながく延のばしてみんか、
とも思おもへり。

世よのいやになる心こゝろの、いとしさよ。

眼めのしたの、肉にくのたるめる、不快ふかいさよ。
眼めを閉とぢ、眼めを開あけ、
それを哀あはしむ。

*

わが脳のうを休やすめしことの、
一ひとときも無なかりしに、
ふと、おどろけり。

*

ストライキ、
やまんともせぬ、おそろしさ。
息いきをひそめて、君きみを思おもふ、われは。

天幕や帆の、
あらし切地の、手ざはりの、心にしたし、
秋となれるかな。

家並の、うしろに、海の
鳴るごとく、ふと佇みつ、
また歩みゆけり。

忙しくも、けふとなれるかな。
わが名すら忘れんとせり、
そと呼びてみる。

非常なる力がほしとおもふかな、
目くらむばかり、
不平つければ。

事ごとに、憤りたるごとき
聲をする、人の間に、
働けるかな。

「うるさし！」とわが叫ぶとき、
一齊に、おしだまるべき
顔のかなしさ。

全身のかすかに痛むゆふべの、
卓子に、
地図をひろぐる。

*
クロボトキンの『パンの略取』を、
半ばまで読みしが——その後、
読むひまのなし。

*
世の人の、大ごゑあげて、わらひぬべき
ことを、わが、いつも、
眞面目におもへる。

眼をとづれば、いつでも、すぐに、
ぐつぐつと眠らるるごとし。
一人てゐたし。

*
ひさしぶりに、聖書をひらき、
こまかなる文字をながめつ、
泣きたくなれり。

秋の風
人のことばのはしはしの、氣にさはるたび、
口笛をふく。

この月ごろ、
長き手がみを書かざるかな。
書くと思ふだに、脳のなやまし。

*
子をつれて、日ごとに遊ぶ、停車場の、
廣場の草も、
黄ばみたるかな。

*
やはらかき寢臺に、ひとり、
夜より日に、
心ゆくまで眠たしとおもふ。

海岸の山の温泉に、

行かまほし。
十月の日となりけるかな。

*
ものはかなく、腹の痛める、ゆふぐれの、
十月の樹に、
花を見いてし。

*
よせの、今はねしたいこの、
ふとさめし冬のよひ寢の、
枕になれる。

腹だたしく泣きたくなりぬ。
人のためのみおもへるごとき
一日なりし。

大ごゑにいきなり呼ぶなかれ。
つかれたる心はいとし、
つひえんとする。

あはれひさしく怒らざるかな、
今日ひとつ怒らんとして、
をかしくなれり。

世にかかる嘘さへ、

いふものか。
その人の顔を、ちつと見つめし。

とはうもなき嘘をききしより、
人間がおそろしくなりて、
門を出てざる。

つと、傍にひるがへりたる
新聞のおとにいたくも、
おどろきしころ。

冬の雨

わが育ちたる、淺草の寺にかへりて、
眠らんとおもふ。

*

おほかたの、わかきむすこのするごとき
不孝をしつつ、
父にわかれぬ。

*

わがすること、わが言ふことの、
ふと、父にあまり似たるに、
哀しくなりぬ。

あたらししく土をいれたる
花苑を、

こころゆたかに、ひとり歩めり。

*

ゆふぐれの卓子のうへにすててありし
おもちやの笛を、
吹いてみるかな。

*

くるほしく、つよき煙草を喫ひし後、
遠く、シベリアの
雪をおもへり。

すべてを、悪まぜめてず、死にしごとき
こころにならんと、
眼をつぶりにし。

ゆふがたの、
膝のたゆけさ、十月の、
心のみいたく働さしごとし。

泣け、泣け、
たそがれの街に、泣ける子よ。
咽のさくるまで、泣けよとおもふ。

不平ある心のまへを、あゆみ行く
見もしらぬ子の、
なつかしきかな。

一日の子守につかれて、うとりとする
夜のやはらかさ。
こほろぎのなく。

哀しくも、をかしくもなく、おのづから
涙の湧くも、
はかなしや、冬。

露西亞卷の煙草を喫ひつゝ、

哀しみぬ、

露西亞へ行くは、いつのことぞも。

*

わが子と、拾ひては投ぐる

十月の、ころしづけき

路の石かな。

*

大門の車庫の廣場に、

品川の鷗の遊ぶ、

冬のあけぼの。

この國の男も女も、さもしげに、

黄いろき顔して、

冬をむかへぬ。

*

十月のあさのひかりの、

すりがらすに、白くよどみて、

虫のきこゆる。

*

口のうちの埃の香こそわびしけれ。

黄昏に向ひ、

唾するかな。

指をもて臉を押せば、

哀しくも、こころよく、

脳のうづくかな。

*

ゆふまぐれ、

隣のいへの戸を閉づる、

それにも、涙浮ばんとせり。

*

いまもなほ、青き顔して、
革命を、ひとり説くらむ。

ひさしく逢はず、

労働にやりしいのちの、

わかき日の戀のごと、また、

いとほしくなりぬ。

*

もの言ふを、損するごとく、

おほぜいの人のうしろに、

火にあたりゐる。

*

拳銃を握らんとする、——握らんと

おもふだに、指の、

こそばゆきかな。

をさな兒の、眠らんとして泣くごとく、
われも、この日ごろ、
泣くばかり、眠らまほし。

人間にんげんの、立ちて歩あくも、哀あはしけれ。
眼めさむれば、夕ゆふ、
背せ骨ほねの痛いためる。

かれら、今いま、
寒さむき街路まちぢをかへるらむ。
日ひねもす、われは、家いへにねむりぬ。

落葉らくえつ樹じゆわが苑えんにある、さびしさよ。
たそがれの風かぜの、
來きて、たたずめる。

この露臺たらいうすく埃ほこりの沈しづみたる
冬の月夜つきよを、
さまよへるかな。

口くちをあけて眠ねむるか、われも、
枕まくらのうへに、眼めをとぢて、
をかしく、かなし。

①
むすめよ、
この黄昏の落葉を、父は焚くべし。
燐寸をもてこよ。

②
人ごゑの、耳にし入らば、このゆふべ、
涙あふれむ、――
もの言ふなかれ。

③
たそがれの、蜜柑をむきし爪さきの、
黄なるかをりに、
母をおもへり。

街角を曲れば、風の、
たそがれの一路に黄なり。
うつむきて行く。

④
労働の、
かなしき愉快をあぢはひぬ。
ひさしく、われら、會はずあるかな。

⑤
隣の灯――雪となるらむ、――
夜の空に、赤くうつれり。
はやく寝ばやな。

眠らんとして、
寝臺のかどの、蠟燭の光を、しばし、
なつかしむかな。

*

妻と子のあまゆる顔を、
そを、いたく叱らんとして、
浮びし涙。

*

眼のたゆく、脳のいたさよ。
あたらしきバナナをむきて、
柱にもたるる。

ひさしく逢はざる顔を、

かぞへみて、

忙しき日ごとが、さびしくなりたり。

*

札幌へ行かんといひて、

行かざりき。

あはれ、間もなく、雪のふるらむ。

*

冬の雨。

市街の寺の大木の、なつかしきかな、
高く立てるは。

焚火せむ、子らよ、といへば、あつめくる
落葉、木ぎれの、
哀しきゆふべ。

*

夜の雪、

事業の後の、たるみたる
心のうへに、しみじみとふる。

*

はんぎよくのゆふべの顔の、
やはらかに見えて、かなしき
あけぼのの雪。

かの、汽船の旅を、

おもひいづ。

さびしき冬に、また、なりにけり。

*

門の前、一路の冬に、

六つばかりの子の遊びをり。

風のふさいづ。

*

死なんと、は、おもはずなりぬ。

生さんと、も、

さまで思はずなりにけるかな。

九州の同志のおくれるザボンの實。

かれらもいま、

さびしく暮らすらむ。

*

おほきなる、黄なる、あらびたる

ザボンの實、

手にのせてあれば、哀しくなれり。

*

夜のしぐれ。

卓子のうへを片づけて、

あたらしきバナナをむきぬ。

冬の海、白く光りて、暮れぬらむ。

ひさしく聞かずよ、

千鳥のこゑを。

*

暖爐のほひにむせて、

戸をあけぬ。

あはれ、ながくも語らひしかな。

*

手袋に、月夜の露の沁むことか。

どこまでも、

どこまでも、あゆみ行かまし。

後 前 の そ

冬ふゆの夜よの室むろをあゆみつつ、
ことことといふわが
靴くつのおとをたのしめり。

めづらしく、金もちのごとき
この朝の寝ざめの心に、
スリッパをはく。

急に腹の減りしに愕き、
床を出て、顔を洗へり。
朝のすこやかさ。

わが家のだれに向ひても、
言ふことが無くなりぬ、——やがて、
ふいと外へ出づ。

けふも、また、電車にのりて、
目を閉ちて、背をよせかけて、
ものを思へり。

このごろの忙しきことを、
母と兄に話して、かへる、
休みの朝かな。

疲れたる貧しき心の我ままを、
一さけば、

いとしくもあるか。

*

ときたまに買ひし煙草の、
外套のかくしのなかの、
古き粉かな。

*

ふと、口をすべりし皮肉の、
なつかしさよ。

この四五日の、むなしき心。

その後の、われらの事業の、成行きを、
訪ひ来ては語る、

さびしき病室。

*

夜ひと夜、四十度の熱に、
うなされしといふ、
疲れたる顔の、朝の影かな。

*

林檎の皮の、
鐘ゑて赤さも哀し、
枕のそばの灰皿の中。

合室の患者のことを、
をかしげに語るわが友の、
頬のやつれかな。

ドクトルの聴診器を借り、
わが胸にあてかへば、——や、
音がする、音がする。

わが友の、寢臺の下、
靴より、
國禁の書を借りてゆくかな。

高臺の、赤き煉瓦の一廊、
通りぬけてゆく、
春の午後かな。

新らしき土のほひの、明るさよ。
公園に来て、
春を感ずる。

日曜の街に見かけぬ、
あの男も、
いつか、中尉になりけるかな。

もとはよく、
目の前を汽車の走るとき、
その下へ飛ばんとしたりし。

*
わが體が、のうつと高く
伸びるごとくおもはれて、
ふいと竹みし。

*
われよりも高き男が、
前を行く。
この身いとしき、ゆふぐれの街。

どの女も、どの男も、馬鹿に見ゆる日なり。
あぶなし、あぶなし。
家へかへらむ。

*
そこら中に、
小さき白犬の死骸の、ころがれるごとし。
二月のゆふべ。

*
あすもまた働くことか。
夜着の襟に、埃のほひの、
黄いろく漂へり。

口のうちに息をふくめては
ぷつと吐く、
このいとほしき、さびしき心。

戸の外そとの犬いぬの寝息いいきの、
なつかしさよ。
二時にじごろに、きつと眼めのさむる。

心こころづけば、すべて、はかなし。
かの事業しぎょうに、
たれかれの面おもての馬鹿ばか氣げて見みえしも。

もしこれが成なしとげられずば、
死ぬしぬのみといふほどの事ことを、
企くはてし心こころ。

夜よるはじめて訪ねて行きし、
わが友ともの、二階にかいずまひの、
冬ふゆの九時くじかな。

革命かくめいを友ともとかなりつ、
妻つまと子こにみやげを買かひて、
家いへにかへりぬ。

ほしがりしものを買ひ来て、
妻と子のうれしがる顔を、
寶にはする。

*
わが息のかすかに酒のにほひする、
かなしくなつかしき、
このごろの寢覺かな。

*
忙しきからだになりて、
いろいろの事がしてみたく
なりけるかなや。

日本に住み、
日本の國のことばもて言ふは危ふし
わが思ふ事。

*
止むべきかと言はんとて來れば、
友すてに止めんと思へり、
われらは哀し。

*
青ぬりの瀬戸の火鉢の哀しみよ、
病床を訪ひて、
いくたび凭るらむ。

「養生の金も無くなりぬ、
人生がつまらなくなりぬ」と
眞面目に、わらへり。

われなりき、——かの年の夏、
ふらりとゆき、ふらりと去りし
一青年は。

わから盡く、
赤き表帡の小冊子。
農家に借りし夏の入室かな。

波止場にて投げつけられし

かの哀しく、尊き石を、
いまも藏せり。

ガラスの中の寫眞畫の、
すこし下へずれたるを仰ぎつつ、
病みてあるかな。

生きてゐることをやめてしまひたし、——
インクの蓋をとるときなど、
ふとおもふ。

讀みながら、髪を撫づれば、
油ぎりて、埃さらつけり。
死なんや、われは。

集りて、われらの語りし一室の、
襖の外、
母の咳かな。

いふがまま、ただうなづきて、
札幌へゆくべき金を、
あたへしも、母。

すべて憂き事業の後の心をば、
抱きて乗れり、
五月の長路。

やがて、そと、
青き林檎に齒をあてつ。
港を出でし、朝の汽車かな。

今ぞ來ぬ、涙よ流れよ。
札幌の街樾のポブラ、
青葉のポブラ。

合歡の樹を庭に植ゑんと、妻にいひて、
ひとりさびしく、
その蔭をおもふ。

*

大きなる蚯蚓におどろき、
鍬を投げぬ。
わけもなくただ土を掘りしが。

*

ただひとりひそかに生きて、
あひことばのふと口にのぼるとき、
寂しさならむ。

工場の鐵うつ音の、
はつきりと心に響く。
齒をみがきをれば。

*

一合の酒に酔ひ痴れて、床に入りし、
そのあくる朝の、
雀のこゑかな。

*

戸をいてて、林檎の花を仰ぎけり。
ここにうつり住み、
三とせとはなりぬ。

わが書のうへに、煙の煤の、
小さく、黒く、飛び来て動けり
やや倦みし時。

ゆふ月の、林檎の花の蔭を、
ひとり歩まんとする
しづかなる心。

死ぬまへに、このポケットに、
人しれず入れてゑむべき
寫真があれかし。

その妻が代りて書ける上がきの、
手が見哀しき
友のやまひかな。

かの男かの女みな、
わが胸にしたしくぞありし。
街の一日。

うれし、うれし、うれし、
心、このごろ、
すべてのものを愛するをうる。

新しきわれの事業を、よしとせし
母のころを、
哀しむ、このごろ。

*
かの家の門を入るたび、
草の花、
四五坪の空地をさびしむ。

*
この日ごろの、
萬事萬事のいさどほろしさ。
さて、そのあとの、しづかなる心。

熱をさまして後、語らんといひ、
二月の夜の、白き薬を、
ちつとみつむる。

*
非常なる悪事は無きか。
全世界の、
音といふ音の死にはつるほどの、――

*
手の白き労働者こそ哀しけれ。
國禁の書を、
涙して讀めり。

女

別わかれては、同どう志しに愧かぢぬ、
ひとり、わが、弱よわく、哀あはしく、
詩しを、おもふ心こころ。

青森に大火事ありぬ、――

うれしくも、
わが古手帑灰になりぬらむ。

*

四たびめに、醫者にとつぎぬ、
とか聞きぬ。

薬の香にも、あきそめしころか。

死にたるは、わかき女と、

さけるととき、

すこし傷ましくおもひけるかな。

*

二月か、三月とは、いつも

つづかざりし、古き日記を、

一束にする。

*

もし、今も、

手函のうちに、入れてあらば、

インクの色、黄ばめるころなり。

日ぐれどき、
萬年筆の銀の帯指のあひだに、
光るはかなさ。

*

桃を植ゑ豚を飼はむと、
おもへりと、
いつの女か、言ひしことありき。

*

かのころの本のあひだより、
おし花の黄ばめるがでてぬ、
かわゆかりしかな。

三月ほど、三十一文字に、
あしざまに、うたひてやりき。
あはれになりぬ。

*

ものごとを、思ひつめるは、をかしきかな。
われも、手番を、
焼きしおぼえあり。

*

かの女の、そらとぼけせし、よこ顔のごとく、
をかしき
さびしき秋かな。

よこ文字を見^みる目^めさびしく、
疲^{つか}れけり。

ふと思^{おも}ひ出^いづるはつ戀^{こひ}の事^{こと}。

しりびとの別^{わか}莊^{ぢやう}に住^すみし秋^{あき}なりき、

はじめて書^かきぬ、

ながき手^てがみを。

*

その庭^{にわ}の池^{いけ}に、

小^ちさき、一^{いっ}艘^{そう}のボートが^ありき。

ひとり乗^のりにき。

ぶらんこの環^かのさしむ音^ねの、

さびしさよ。

となりの庭^{にわ}の、ゆふぐれの秋^{あき}。

*

十月^{じゅうがつ}の一日^{いちにち}の心^{こころ}、

おだやかに、

鳥^と舎^やをつくりて、暮^くらしけるかな。

*

かれ草^{くさ}の、

黄^きなるなぞへの快^{こころよ}さ。

讀^よみつかれては、水^{みづ}を眺^{なが}むる。

お臺場に、ぼつかりと一つ、赤き灯の
ともれるを見ては、
寝るが常なりし。

*

をかしさは、
いつかインクの無くなれる萬事筆を、
携へしかな。

*

ある朝の小さきやけどの、
傷のあとに、
黄なる瘡蓋のてきてあり、冬。

この日ぐれ、
葉蓑の香の戀しさよ。
よこ文字のうたを、うたひてありしに。

*

ありし冬、
女主人に、つと、いきなり、抱きしめられし
煖爐の前。

*

眼をつむり、
人さし指を、こつこつと、額にやれど、
おもひ出されず。

こなしやぼん、わが髯面の、
たそがれに、おぼろに白く、
ふりつもる雪。

*

たそがれどき、舌にしみじみ、
葉莖のけむりの苦がさ。
雪の音がする。

*

一束にたばねたるまま、しまひなくせし
手がみのことを、
おもひいづるころ。

遠く、石を、

浪に投げては、哀しみき、
病ある子を忘れぬ心。

*

ゆふがたの乳の白さよ。
その味にも飽きし、二十日の、
海のおとかな。

*

やはらかに、
夜着の白さに浮びきし、
そなたそがれの、合歡の花かな。

わがくるま、轍やはらかに、
かの路の、砂をさしれり、
おもひいづれば、

*
かの濱の、むかしの宿の額の文字、
口にのぼりつ、
忙がしきとき。

*
夏ゆふべ、あと追ひゆきて、
かの宿に、はきしスリッパも、
忘れがたしや。

卓子の角に腰かけて、

語りたる
晚餐の後の、たわいもなき事。

*
濱の草の葉すゑの螢、
風すすしく、
江の島の方へ、飛びゆきしかな。

*
いひやりしとほり、その朝、
二等室に、
つつましく、待ちてありし哀れさ。

あくる年ひとり行きしに、
その庭の廣くなれるも、
寂しかりしな。

濱の砂の、素足にかかる快さ。

このおもひでの、
こそばゆさかな。

肺といへば、咳の出るものと、おもひしを、
咳も出ず死にし
人のいとしさ。

わかれけり、ともに寝ざりき。
おろかにも、たくみにいつはりし
かのときの心。

その後も、三たび遊びき。

おもひでに、
なでしこなども、摘みにけるかな。

指に染めるインクのごとく、
わががところのこれる
海の香を哀しめり。

ピンポンの音やはらかにまろび來し、
かの海邊の、
朝のまくらかな。

*
その膝に枕しつつきさし海のおと。

七年たてば、
妹のごとし。

*
ひさしく、のぼらぬ三田のひぢり坂
その家の前に、
拭きし汗かな。

送りゆく街の夜ふけに、すれちがひし
男の顔を、
いまでも忘れず。

*
朝ゆふの祈禱のときは、
寄宿舎にかくると言ひき。
さこそと聞けり。

*
秋の夜の、インクの滓の、
ペン尖につくを氣にしつつ、
書きたりし文。

そのうちのひとりには死にき。
わかれつる一人は、いづこに、
子をあやすらむ。

*

久しく會はざりし間に、
忙しくわが働ける間に、
君は、みまかりぬ。

*

わが友の妻となりしも哀しけれ。
七年そひて、
病みて、死ににき。

子を産む、そのことのために、
女の死ぬは、いたまし。
君も、しかりき。

*

友の葉書——
妻死せりと、遠く、告げ來しを、
間にはさみ、閉ぢし本かな。

*

わが身にちかくありしに、おどろきぬ——
きよく戀ひ、きよく怨める
ひとりの女の。

弟おとうとのごとく思おもひて語かたりけむ、

語かたりしことを、
おもひいづれば、

*

そのころは、われの心こころも、
月つき草くさのはかなくさける
闇やみなどを愛めてし。

*

友ともとわれの語かたれる傍そばに、
ひそやかに來きて座まりては、
きく人ひとなりし。

ただいちどひきて聞きかせき、

ゆく春はるの、ピアノのおとは、
哀あはしかりけり。

*

忘わすれえぬ人ひとのあまたの、
そのなかのひとりとはして、
しづかにわかれぬ。

*

その乳ちちに、わが手ては走はりて、くるはんとす。
五ご月がつの路みちを、
並ならびて歩あり。

その膝の、
ピアノのおとに合はせつつ、おもひなげに拍てる
指を憎みき。

*

かかるとき、涙よ、流れよ、
戀はるるは、かかるときぞと、
心のわらへり。

*

白百合の花を市に見て、
いにし世の人にあへるごとく、
おどろきしかな。

その年のゆく春のころ、
おぼえんともおもはず、おぼえて、
忘れし玉突。

*

『死にたし』と、
くちづけの後、に、ささやきし、
かの女の嘘は、なつかしきかな、

*

二人にて歩むはたのし。
落葉の林を、汽車の、
三たび通れり。

砂やまの砂に、ひそかに、
つよき酒をかくせりといふ。
たはむれのごとし。

*
それよりは、酒にも酔はず、
かるやかにわらふ女を、
うとみそめにき。

*
その手に、わが手をおかば、
いかになりしやらむ。
かの冬の夜の、いまもおそろし。

會はましといひやることを、
負くるごとく、

たがひにおもひしころの、なつかし。

*
これのみは、いつおもひても、
こころよし、
女のまへに、泣かざりしこと。

*
ふと、——深夜の街を辿りて、
哀しみぬ、
あはれ、ひさしく、海を見ざるかな。

おほきなる犬を忘れずよ。
かの家の前に立ちどまり、
たばこをつけしとき。

*

むしやくしやせし後のしづかさ
ふと思ふ、
小菊を呼びて、酔ひて遊ばむ。

*

こつそりと小さきめいしをくれにけり。
しぐれの海を、
遠くながむる。

宴會の末坐にありて、

哀しめり、

藝者もさびしき時のあるらむ。

*

めづらしき春の夜のころ、
なつかしく、
あかつきの土に、沁みも行くかな。

*

つつましく愛せし女——
けふとなりて、しづかに思へば、
もつとも戀し。

と家と街

すこやかに、赤くふとれる手ざほりを、
わが頬に感ず、
哀しき五月。

わがこころにらめくらしてゐるごとし、
真面目になれば、
いよいよをかしき。

*

鼻先はなきにつきつけられし拳こぶしにも、
怒りいかえぬごとき、
世よわたりをする。

毎日まいにちあさ、電車でんしゃに乗りて、おもふには、
車掌しやせうよりわれ、

すこしはよきかな。

*

うしろより『わ』とおどせしに、
先方せんぽうの、おどろかさりし、
ごとき寂さびしさ。

*

ひかえめは、
ホワイトシャツの袖口そでぐちの、
黒くろき汚きたれも見みられじとする。

わが前に、いたいけな顔を、突き出して、
あかんべをする、
秋のころか、

ドアを出づ、
秋風の街へ、
ぱつと開けたる巨人の口に飛び入るごとく。

焼趾の煉瓦のうへに、
小便をすれば、しみじみ、
秋の気がする。

だぶだぶの古きズボンのポケットに、
両手つき入れて、

あき風を聴く。

帯をひきずりてゆく男あり。
をしへてやるも、
ものうき夕ぐれ。

死刑囚が、死刑のまへに、
喫むといふ、煙草を喫めど、
慰まぬかな。

啼くをふと、猫かとおもひしに、
わが兒なりき。
をかしく、やがて、悲しくなりぬ。

*
かたはらの、本の表番が、そりかへれり。
秋の日南に、
物おもひする。

*
前の家のさしきのさまの、
二階より、あらはに見ゆる
秋のさびしさ。

かきねより、やねへ飛んだる、白猫の、
やはらかき晝も、
十月なれや。

*
煙草のめば、すぐにあたまの、
いたくなること、
秋のさびしきひとつなるべし。

*
神経衰弱のときにのむ水薬の
ほんのりと黄なる、
秋の空氣かな。

いつよりか、ボタンのとれしシャツの袖、
たくしあぐるに、
ふいとさびしき。

*

このごろ、また、
わかき女の見ゆといふ、
もの音もせぬ裏の家かな。

*

うしろより、
たそがれの街の、すてことば、
わがことと聞きし、秋はさびしや。

二度聞きし、暗き小路の、
はやり唄、
われしらず、口へのぼるさびしさ。

*

古靴をはいていてしに、
爪がみな、ちくちくうづく、
ゆふぐれの秋。

*

ひしやくしやして、
急にすつかり片づけし、
わが六疊の、秋の夜かな。

ひとり立てば、また、ひとりたつ、
一人來れば、また、ひとりくる、
ベンチの秋かな。

*
苦虫をつぶせしごとき一日かな。

わが妻よ、
いちどわらはむ。

*
喰ふことがただおもしろさに、くひたりし
少年のころの、
飯の味かな。

働くは、
さまで苦しくもあらぬかな、
しか思ふやうに、なりし哀しさ。

*
わが兒を、あやしてありぬ、
馬鹿げたることとふと思ひ、
ふと家を出づ。

*
人を見れば、
みな、その鼻に、うす黒く、
墨のつきたるごとく、をかしき。

公園の水まき車、
しやと、いきなり、われ愕かせし、
秋のゆふぐれ。

ぼろ靴が泥を喰ひたる
気味わるさ。
ぬかるみを來て、音楽をきく。

わが言ふを、聞きかへされし、うるささに、
ぢつとだまれば、
あき風のふく。

鐵橋を、白く塗りかへし

寂しさよ。
この大川の、秋のゆふぐれ。

わが友が、
くつついて歩く、秋風の、
ふわりと廣き長き外套。

りにらめても、
いつものやうに逃げてゆかず、
路のまんなかの秋の犬かな。

よこ抱きに、乳をのませつつ、ものをとる
茶の間の秋の、
妻の顔かな。

*

わがむすめ、やつと眠れば、
家は、みな、爪先のみの、
秋のゆふぐれ。

*

これだけは家の寶ぞと、
一箇に父が遺せし、
反古のかずかな。

わが家の、貧しきときに生れあひて、
よく病みきてふ、
兄も老いそめぬ。

*

わが打てば、「うまい、うまい」と、
甥たちがひよつとこを踊る、
太鼓のおとかな。

*

人まへに風をやぶりて、赤らまぬ
面もつまでに、
年をとれるか。

わが捨てし、ころりと白き涕帯に、
秋かぜぞふく、
佇まれけり。

*
呼鈴が、赤く斑のごとく錆びてあり。
めづらしく、
書齋にすはれば。

*
手の平の、
秋のゆふべのものあはれ
いつか鼻糞を丸めてありし。

ものおもひ。
十一月の椽に干す、旅の鞆の、
草の匂ひかな。

*
ふらりとひとり寄席に入りつ、
わたされし木戸札の垢の、
黒き手ざはり。

*
わが足の甲を見れば、
赤黒く、小さき皺よれり。
冬なるかなや。

わが前に、
昔の型の煖爐の、赤く燃えたる、
懐かしきかな。

*

子の聲を、

『しっ』とたしなむる妻の聲。
さびしき家に、ものおもひする。

*

讀まば、いまも、涙やおちむ、
ツルゲネフの黄なる表帟の、
なつかしきかな。

ふところ手、
戸山ヶ原へ寝に行きぬ。
落葉するころは、毎日なりき。

*

わが母は六十をこしぬ、
人まへに、おねむりをする、――
寂しき女かな。

*

爪のうへに、
おどろくばかり大きなる黄なる耳糞の、
ころげけり、冬。

ぼんやりと肘をよせしに、
角窓の、
しつくいしが白く肘につきたり。

暖爐の夜の股火の、
ものおもひ。
かたき椅子にも二年あまりか。

一冊を、
息もつかずに読みし夜あり。
四五年前になりけるかな。

窓ガラスの埃を拭きて、
二階より街を眺むる、
つかれし心。

ひとり来て、しづかに歩く、
暖爐の消えんとする室の、
冷えの快さ。

夜あそく、家にかへれば、
死ぬばかり、子どもの泣けり。
もの言はず、寝る。

『今まで語りしことは、
みな嘘なり、あは』とわらひて、
おこられしかな。

*

かくれんぼ、
少年の日の戀しさよ。
今は世に息をひそむる。

*

無くなりぬとおもひしものが、
ついそこにあるごとき
ばかりしさかな。

二年あまり、大事にしたるうす髯を、
すばりと剃らせぬ。
快きかな。

*

われもその男のごとく、
おもひがけぬ金を手に入れて、
気がちがへかし。

*

瀟洒たる燈子と椅子が、
しきりにほし。
書齋の春の風の明るさ。

*

足の裏に、
椽に脱ぎ捨てしスリッパの、
ほつかりと温くき、春の夕ぐれ。

とりいだす書架の本の手ざはりの、
その革表帙
春の雨ふる。

*

わがむすめひとり寝臺に目さめたる、
小さきあくびの、
春のあけぼの。

*

ふつふつと腹に湧く泡、
ものはかなき春の日ぐれの、
葉蓑の香かな。

ふと、
路ばたに梅さけり。
老人の心が、したしくなりぬ。

上草履。

午後の休みに出でて踏む、
銀座通りの、春の土かな。

眼をひらくとき、ほんとうに氣のちがふごとく、
おもはれて、——ちつと、
夜具をかぶりし。

床の間の妻のヴォリン、
Eのいとを、さきとこすりし、
この氣まぐれは。

ありあまる、しかして不用の、
わが愛のすてどころなし。
土を見つむる。

ゆふぐれの巷に買ひ來し花躑躅、
赤き花ひとつ、
ひらきたるかな。

子と、妻と、下女と、おもちやと、
われと、——みな、
骨が、ばらばらになりたるごとし。

*
このあたま、
街をあるくがあぶなさに、
ちつと書齋に、読みし一冊

*
た、た、た、た、た、と、
この眞面目らしき無言を、
ラッパでも吹いて、愕かせよかし。

大きな室に働ける、
寂しさよ。
戸外の、日ぐれの、雨を知らざりし。

*
ゆふがたの黒の毛襦子の、
事務服の襪に見いりし、
つかれし心。

*
帝王のごときところに、
労働よりかへりて、ゆふべ、
妻を叱れる。

わが力を、わが心を、
すべてかたむけて、働かしことなし。
一日も無し。

こみあへる電車の中に、
おもひつめ、はづかし、いつか、
涙を流せり。

滴り滴る汗の、
快さよ。
佇みて、しばし、拭はず。

ある午前、
小学校を見に行きぬ、
この氣まぐれも、哀しかりけり。

戯談をいひあへるとき、
突然とおこられしより、
人のおそろし。

かの男の無言こそ、をかしけれ、
かく言はれつつ、
ものをおもへり。

わが心
風とほしよき工場に働けるごとし。
五月の午前

長ぼそき食パンを、
腋に抱きて、
わが家へ迎るごとし、——ゆふべの心。

哀しきは、
職業のある、その事を幸福とする、
いまの、心かな。

「働かぬゆゑ、貧しきならむ、」
「働きても、貧しかるべし、」
「ともかくも、働かむ。」

靴の泥を、反古もて拭きつ。
忙しく働きし後の、
ほうけしころ。

外國の人の心の、
なつかしさよ。
その顔のみも、快さかな。

母と妻と子とを伴ひ、
六月の、
明るき海のほとりに、遊べり。

砂濱に、小さくつくばひ、
わがむすめ、蟹と遊べり。
世界事なし。

寝臺よりころげ落ちたる一大事。
わが兒をかしき、
夏の夜なるかな。

あつき砂に、からだを埋めて、
いつまでも、
いつまでも、蟹の穴を見つめし。

わがジョンの背を撫づるこそ、
世の人と語るより、
たのしけれ。

やうやくにも伽嘶を讀みはじめし、
わが露西亞語よ。
秋となりけり。

わが好きなペンキのほひ。

秋風の街の路ばたに、
ふと佇めり。

ある朝の、

銀座の街の時計臺
ものめづらしく、仰ぎつつ行けり。

わが父の亡せぬ後の、わが母の、

すこやかに、
花いちりせる。

妹の手がみの文字を、

まれに見て、
心あかるく、さびしめるかな。

母を、われ、いまも哀しむ。

わが戀のやぶれし日、
旅の銀をあたへさ。

散歩にといてしを何に急ぎけむ。

佇めば、街、
秋の風ふく。

わが寝顔に、たはむれし手の、いたいけさ。
たるき眼をあけて、
わが子を眺むる。

*
つとめより、夜霧の街をかへるとき、

心しめやかに、
母をおもへり。

*
ころされし、わかきやもめの、身のうへを、
しらべて、かへる、

路の雪かな。

工場へのはしごだんこそ哀しけれ。

さうに、あやうく、
雪のかかれる。

*
三四人、夜のつとめに、

しんみりと、雪こそつもれ。

無事なるかなや。

*
りんでん機、今こそ響け。

うれしくも、

東京版に、雪のふりいづ。

ぬかるみに、霜月の朝の、
晴るるとき、
つとめにいづる身はさびしけれ。

*
あはれ、かく、
かの女の家の、のきばにも、ふりつもるらむ、
たそがれの雪。

*
夜おそくかへるつとめの、
あぢはひを、
ましろき靄に、かなしめるかな。

湯たんぼのぬくみが、肌を、
はひめぐる、
雪のふる夜の、ものあはれかな。

*
不平を、言はぬ日ごろの、さびしさよ。
雪どけ路を、
かへり来りぬ。

*
日南ぼつこ。
このいたづらな、健やかな、むすめの顔に、
ふと眠くなる。

快こころよく働はたらかしめよ、
健すこやかかに眠ねむらしめよと、
けふもいのれり。

— 黄昏に —

同 著 者 の 作

NAKIWARAI

歌 集

定 價 金 三 十 錢
送 費 を 要 せ ず

な き わ ら ひ

東 京 東 雲 堂 發 賣

一 千 九 百 十 四 年 四 月 發 行

明 治 四 十 五 年 二 月 十 五 日 印 刷
明 治 四 十 五 年 二 月 十 八 日 發 行

著 作 者

發 行 者

印 刷 者

土 岐 善 麿

東 京 市 芝 區 濱 松 町 一 丁 目 十 五 番 地

西 村 寅 次 郎

東 京 市 京 橋 區 南 傳 馬 町 三 丁 目 十 番 地

橫 田 五 十 吉

東 京 市 神 田 區 松 下 町 七 番 地

發 行 所

不 許 復 製

黃 昏 に

東 京 市 京 橋 區
南 傳 馬 町 三 丁 目

東 雲 堂 書 店

電 話 京 橋 一 六 三 九
振 替 東 京 五 六 一 四

定 價 金 五 拾 錢

東雲堂書店發行圖書

詩集	戲曲集	歌集	歌集	歌集	詩集	詩集	小說	小說	小說	詩集	詩集	論集	歌集	歌集	歌集	歌集	評傳	文藝雜誌
思	午	別	收	霧	路	星	放	二	邪	演	水	桐	黃	哲	人			
後	三	握	の	湖	傍	の	十	二	宗	劇	莊	の	香	力	ア	ベ	ン	タ
出	時	離	砂	花	浪	集	篇	門	聲	記	花	に	！					
北原白秋	吉井勇	若山牧水	前田夕暮	石川啄木	河井醉茗	川路柳虹	中村星湖	岩野泡鳴	田山花袋	北原白秋	小山内薫	吉井勇	北原白秋	土岐哀果	石川三四郎			
(五版)定價金九十錢	(再版)定價金壹圓	(三版)定價金七十五錢	(再版)定價金七十錢	(新刊)定價金六十錢	(新刊)定價金五十五錢	(新刊)定價金五十錢	(再版)定價金六十五錢	(新刊)定價金一圓廿錢	(再版)定價金五十五錢	(再版)定價金八十五錢	(新刊)定價金八十錢	(新刊)定價金九十錢	(近刊)定價金八十五錢	(新刊)定價金五十錢	(新刊)定價金八十錢			
送費金六錢	送費金八錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金八錢	送費金八錢	送費金六錢	送費金八錢	送費金八錢	送費金六錢	送費金六錢	送費金八錢	送費金八錢			

每月一日發行 定價一冊二十五錢 送費二錢

